

令和 2 年 5 月 5 日現在

機関番号：82503

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03108

研究課題名(和文) 民俗展示の多言語化のための基礎的研究 - 東アジアの水産資源を素材として

研究課題名(英文) Basic Studies of Multilingual Displays in Folkloric Museum Exhibitions: A Case Study of Fishery Resources in East Asia

研究代表者

島立 理子 (SHIMADATE, RIKO)

千葉県立中央博物館・その他部局等・研究員(移行)

研究者番号：00332354

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：人々が食用等で日常的に利用する水産資源は、利用する人々によって、生物の分類学とは違う、独自の呼称で呼んでいる。博物館の民俗展示において、生活に密着した生物の多言語化を行う場合には、それぞれの言語を使う人々の文化を正しく理解した上で行わなければ、様々な誤解が生じることがわかった。

多言語化を行う場合には、生物名を単に翻訳するだけでは展示を理解することは難しい。日本海という同じ海に接している日韓においてすら、韓国では日常的に利用されているが、日本では一般に使われている名称のない魚があることがわかった。博物館の展示においては、名称を翻訳するだけでなく「どのような魚」であるか具体的に記す必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

博物館の民俗展示における多言語化の問題について検討し、新たな多言語化の在り方について示すことができた。

具体的には、それぞれの言語を使う人々の文化を理解した上でなければ翻訳は簡単ではない。しかし、展示キャプションに資料名を記すのではなく、その資料に語らせたことの要約を記し、その部分を多言語化することで多くの問題が解決することがわかった。

研究成果の概要(英文)：The names for particular fishery resource items used daily by humans for food or other purposes are unique in each culture and not the same as their taxonomic terms. In multilingual folkloric museum exhibitions, it has been found that various misunderstandings can arise in cases where the name used for a fishery resource item which is closely involved in the daily lives of a particular group of people is a colloquial term and / or translated using a colloquial term without consideration of cultural context.

It is less likely that multilingual exhibits can be understood fully if translations are carried out using only colloquial names in each language. This study reveals that even in Japan and Korea, which share a sea and its resources, some fishes routinely used in Korea do not have common names in Japan. In multilingual museum exhibitions, it is necessary not only to translate the names of fishes into colloquial terms, but also to provide specific information as to the species.

研究分野：博物館学

キーワード：多言語化 民俗 展示

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ここ数年の海外(特にアジア)からの観光客の増加、5年後に予定される東京オリンピックの開催によって、公共機関での案内の多言語化が積極的に進められている。博物館における展示解説、資料紹介パネルなどの多言語化も急務である。しかし、動植物などの名称に「学名」という世界共通の基準がある自然史系の展示とは異なり、人文系展示の多言語化には独特の課題がある。

実際の博物館の多言語化の現場では、現行の展示パネルや資料紹介パネルの原稿を、展示の専門分野とは全く関係のない翻訳者に丸投げするだけということが見受けられる。そのため、間違え、勘違いが多くみられ、展示内容が正しく伝えられているか大いに疑問である。また、人文分野、特に民俗分野の展示では、資料名として民俗語彙(方言、地方名)を多用しており、専門外の人々が簡単に翻訳することはできない。したがって、博物館学芸員とその言語に精通した翻訳者の共同作業は欠かすことができないし、できれば、その言語を母国語とする当該研究分野の博物館職員や研究者をも含めて議論を行い、翻訳作業が進められるべきである。

### 2. 研究の目的

博物館展示の多言語化が急がれている昨今であるが、歴史的、地域的な差異の大きい固有の語彙を多用する人文分野の展示の多言語化は、他の分野の展示に比して難しい。特に生活の中で利用される動植物資源を例にとると、国内においてすら同じ種の生物が地域ごとに違う名称で呼ばれており、その翻訳にあたっては慎重を要する。また語学辞典においても、生物名には多くの誤訳が見つけられる。こうした状況では、たとえ展示パネル等の外国語への翻訳を行ったとしても、外国人にその内容を正しく理解してもらうことはできない。そこで本研究は、海洋生物資源を対象として、博物館に勤める人文系・自然系の研究者が共同で調査、研究することで、急務である博物館展示、民俗展示の多言語化に向けた基礎資料としての「日韓海洋資源比較」を行い、これを用いて展示を行うとともに、博物館展示の多言語化の在り方について考えることを目的とする。

### 3. 研究の方法

日韓両国において、魚類や海藻類を専門とする生物学研究者と、生活文化を専門とする民俗学(文化人類学)研究者が協力して現地調査を行ない、「日韓海洋資源の言語の比較」に関する情報の蓄積を行った。このデータをもとに、日韓両国で開催した「昆布とミヨク - 潮香るくらしの日韓比較文化誌」において、展示パネル、キャプション、映像等の使われた海洋資源の翻訳に活用した。また、韓国語に限らず、博物館の展示における多言語化のあり方について、千葉県立中央博物館で開催した『『オリンピック・パラリンピック』と千葉のスポーツ史』において実践的な試みを行った。

### 4. 研究成果

#### (1) 日韓の水産資源に対する認識の違いから混乱が生じている

日本海という同じ海に面している両国であるが、水産資源にかかわる単語をみていくと、両国で利用している水産資源に違いがあること、好みが違うことが明らかになった。

日本において、「イワシ」と呼んでいる魚は分類学上3種類ある、カタクチイワシ、ウルメイワシ、マイワシである。韓国では、この3種類を明確に区別しており、日本語の「イワシ」にあたる言葉はない。日本ではこの3種類を同じ仲間として利用し、かかわってきているのである。一方で、韓国の場合はこの3種類を区別して付き合ってきていることの表れでもある。

日本語で単に「イワシ」と表記されている文章を翻訳する場合、3種類のうちどれなのかを確認する必要がある。このイワシの翻訳の問題は、明治時代以降実際に混乱が生じており、近代の日韓の水産資源に関するデータや文献を利用する際には十分に注意を払う必要があることがわかった。

このような日韓両国の水産資源のグルーピングの違いは、他にも多数ある。韓国には日本のタコにあたる言葉はなく、マダコ、イイダコ、ミズダコを区別している。タラも同様で、日本のタラにあたる言葉はなく、マダラ、スケトウダラは全く別の言葉で表している。

韓国では、スケトウダラを干したものを生活の様々な場面で珍重して利用している。日本でも、干したタラは利用するが、マダラかスケトウダラかはあまり重要ではない。

逆に日本においては、サケは日常的に食卓に登場するが、韓国ではサケが食卓にのぼることはほとんどない。春先から初夏にかけてのサケをトキシラスと呼ぶなど、サケを様々な分類をしている。

生物をどのようにグルーピングするかは、その言語を利用する人々の生活・文化とのかかわり方に由来している。

#### (2) お互いの文化を理解した上でなければ正しい翻訳はできない。

分類学上の分類とは違う、生活のなかで使われている生物の分類・グルーピングは、それぞれの言語を使用する人々の文化を背景としているのは、前述の通りである。

つまり、実際に博物館の展示において多言語化を行う場合、特に生活に密着した文化を紹介する民俗展示において、安易な翻訳は避けるべきである。

お互いの文化の中で、その生物がどのような意味を持っているかを理解した上で翻訳しなくては、展示によって伝えたいと思っているものとは違う内容を伝えてしまう可能性もある。

### (3) 日韓の水産資源比較情報を活用した展示からみえたもの

2019年10月～5月にかけて歴史民俗博物館、韓国国立民俗博物館で開催した企画展「昆布とミヨク - 潮香るくらしの日韓比較文化誌」は、本研究で収集した水産資源比較情報を活用して多言語化を行った。

その過程で、以下のことが明らかとなった。韓国ではよく利用されるが、日本ではほとんど利用されない水産資源、あるいは逆もある。そのような水産資源を翻訳する場合には、単に種を同定して、その和名をあるいは韓国語名を記せば済むものでない。展示で伝えたいこと意識した上で、あえて資料名を記さないという選択肢をとることも必要である。

たとえば、韓国で塩辛の原材料とする魚、*Collichthys lucidus* (学名) というものがある。日本ではほとんど水揚げがないが、韓国では東海岸でアンコウ網という漁法で獲り塩辛にして、広く流通している。この *Collichthys lucidus* は、カンダリという和名が与えられているが、日本国内で流通することはない。

展示において、「*Collichthys lucidus* の塩辛」をどう翻訳するのが適切であろうか。単に「カンダリの塩辛」と訳しては意味がない。和名がわかったからといって、それだけでは展示の意図を伝えられない。カンダリは二ベの仲間なので、「二ベの仲間の塩辛」と訳すべきか。しかし、二ベといわれても、われわれ日本人にとっては相変わらず馴染みのない言葉である。日本人にとってなじみのある魚名を使うとすればイシモチになる。「イシモチの塩辛」あるいは「イシモチの塩漬(調味料)」とするべきであろうか。展示のなかで、「*Collichthys lucidus* は東海岸でしか水揚げされないが、その塩辛は西海岸においても広く流通している」ことを伝えたいのであれば、また別の翻訳が考えられる。「韓国では魚の塩辛を料理で使う」ということを伝えたいだけであれば、どのような魚かまで翻訳する必要はない。

### (4) 博物館展示の多言語化の1つの方法

多言語化にあたって、パネル、キャプションすべてを同じように多言語化するのは展示スペースの問題もあり難しい。パネル全文を多言語化したとしても、キャプションをすべて多言語化するのには非現実的である。これまで多くは、キャプションの資料名だけを多言語化してきた。しかし、前述の例のように単に資料名を多言語化するだけでは、展示の本来の意図を伝えることができない可能性が大きい。

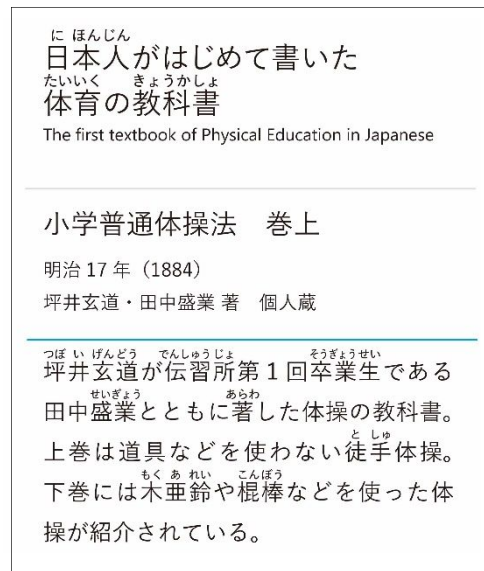
その対策として、短い言葉で、その資料に語らせた言葉やキャプションに記し、それを多言語化する実践を、2020年3月～5月に千葉県立中央博物館で開催した『『オリンピック・パラリンピック』と千葉のスポーツ史』において行った。

右の図がその例である。資料は明治はじめの体操の教科書である。資料名は「小学普通体操法」であり、従来であれば多言語化にあたって、この資料名を翻訳してきた。しかし、展示のストーリーの中で、資料に語らせたことは、「日本人がはじめて作った体操の教科書」であることである。そのため、資料名よりも目立つ位置に「日本人がはじめて書いた体育の教科書」と記し、それを多言語化(この展示の場合は英訳)した。日本語のこの部分だけを読んでも展示の概略を理解できるようになっている。

この試みは、日本人の観覧者に対しても好評であった。キャプションの最初に、難しい日本語が並んでいるより、わかりやすい言葉で資料の紹介をしてあることで、展示を身近なものに感じてもらえたようだ。最初の一文を読んで、興味がわかれば、下部の詳しい説明を読むようにすればよい。この試みは単に多言語化だけでなく、博物館の展示全体に対しても、意味のある取り組みであったといえる。

### (5) 最後に

博物館の民俗分野における多言語化にあたっては、単に単語を翻訳するだけでは意味をなさない。互いの文化を理解した上で行う必要がある。また、実際の展示の際には、展示室にある全ての言葉を多言語化することは現実的でなく、少ない言葉で、展示の全体を理解できるような工夫をして、その多言語化を行うべきである。



## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 島立理子	4. 巻 1
2. 論文標題 市の風景	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 韓日海洋民俗誌	6. 最初と最後の頁 42 - 51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島立理子	4. 巻 53
2. 論文標題 動植物の民俗語彙を考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 博物館研究	6. 最初と最後の頁 19,22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島立理子	4. 巻 32
2. 論文標題 日本千葉県館山市立博物館所蔵の " チョウセン " と呼ばれる海女の潜水着とその特徴	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 生活文物研究	6. 最初と最後の頁 36 - 47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 黒住耐二	4. 巻 13
2. 論文標題 東アジアにおける貝製仮面およびその類似製品に利用された貝類の同定	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 千葉県立中央博物館研究報告 人文科学	6. 最初と最後の頁 82 - 96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島立理子	4. 巻 1
2. 論文標題 一枚の写真から広がる世界ー総合資料学の試みー	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 総合資料学ニューズレター	6. 最初と最後の頁 13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 島立理子
2. 発表標題 市の風景
3. 学会等名 韓国民俗博物館国際研究セミナー (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 磯本宏紀
2. 発表標題 瀬戸内漁民の朝鮮海出漁と技術移入ー潜水器漁民の事例を中心にしてー
3. 学会等名 歴博国際研究集会 近代における日本人の朝鮮出漁とその文化的影響 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 菊地則雄
2. 発表標題 日本と韓国における海藻養殖の比較
3. 学会等名 海の生産と信仰・儀礼をめぐる文化体系の日韓比較研究 (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	菊地 則雄  (KIKUCHI NORIO)  (00291112)	千葉県立中央博物館・その他部局等・研究員(移行)   (82503)	
研究分担者	駒井 智幸  (KOMSI TOMOYUKI)  (20260242)	千葉県立中央博物館・その他部局等・研究員(移行)   (82503)	
研究分担者	黒住 耐二  (KUROZUMI TAIJI)  (80250140)	千葉県立中央博物館・その他部局等・研究員(移行)   (82503)	
研究分担者	後藤 亮  (GOTO RYOU)  (10769897)	千葉県立中央博物館・その他部局等・研究員(移行)   (82503)	